

ダーヨとねい

やぐらうと

ダーヨとねこ

登場人物紹介

第1章 人間と猫 みらいと今

第2章 成果を出す4ステップ

第3章 結果が出ない！

第4章 頑張りのご褒美

第5章 自責と他責の境界線

第6章 脱力のしかた

第7章 力の入れどころ

第8章 良さの伝え方

第9章 育児と育猫

第10章 失敗とはなにか

登場人物紹介

ダーヨ……国王の元お墨^{すみ}付き大臣。今は占い師として活動している

チヨンサ……ダーヨに憧れ、師^し事^じする優しい中年男性

ムネマ……少し荒っぽいが、実は心根^{こころね}は優しい三毛猫

第1章 人間と猫 みらいと今

人間と猫

ある街に、ダーヨという占い師がいた。

昔は王国お墨付きすみつきの大臣で、その有能ぶりゆうのうを買われ、王からも絶大な信頼ぜっだいを置かれていた。

しかしなぜかダーヨはしばらくするとその身分を捨て、王宮おうきやうを離れた。そして街の一角で、占いを始めたのだ。

占いと言いつつ、その人のビジネスや人生のアドバイスをし、それが的確てきかくで役に立つということ卖了っ子占い師となっていた。

そして、ダーヨに相談をしに来て、そのままダーヨの考えに陶醉とうすいし、弟子として雇ってもらうことになったのが、チョンサという男である。小太りな彼は無害な男で、とりあえず周囲に対し優しくかった。しかし自分を主張するのが苦手で、なかなか自分のビジネスを成功できずにいた。そんなチョンサだが、誰にも持っていない特殊能力を持っていた。

ダーヨの元で働くようになって数週間が経ったある日のことである。

チョンサはボーとしながら道を歩いていた。

その道の横にある家の屋根に、三毛猫が気持ちよさそうに寝ていた。

その猫はムネマというオス猫であった。ムネマは気持ちよさそうにゴロゴロと、暖かい日差しの中、屋根で寝ていたのだが、うっかりとその屋根から転げ落ちてしまったのだ。

屋根から落ちたムネマと、とぼとぼと歩いていたチヨンサがちょうどぶつかってしまった。ゴチンとこれまた痛そうな音が鳴り響いた。

「いてててて・・・」

チヨンサは思わず尻餅しりもちをついて、頭を撫なでた。

すると、こんな怒号どごうが聞こえてきた。

「まったく何してんだよ、痛いじゃねえか！」

すみません・・・と謝ろうとしたが、そこにはチヨンサと同じく頭を手で抱えた三毛猫がいるだけで、人の姿は見えなかった。

「あれ、どこかで誰かに怒られた気がしたんだけど」

チヨンサが不思議がりながら辺りを見回すと、猫がこっちを見ながら、なんと喋ったのである。

「だから痛えって言うてるだろうが。どうしてくれんだよ。ってあれ、なんでおれ、人間と喋ってるんだ？」

世の中不思議なことがあるもので、ぶつかった拍子に、なんの因果いんがか、人間と猫、お互いの言葉がわかるようになってしまったらしい。

猫と話ができる、これがチヨンサの特殊能力となった。

将来が不安なお客さん

この日も占い師ダーヨの元には相談をしに、お客さんが来ていた。

チヨンサがやることは、お客さんにお茶を出したり、事務所の掃除をしたり、ダーヨからお使いを頼まれたりという雑務を主にこなしていた。

お客さんが帰って、一息つき、チヨンサはダーヨにお茶を出してあげた。

「お疲れ様でした、ダーヨさん」

お茶を受け取ると、ムスツとした顔をしながらも、

「ありがとうございます」

と言って、お茶を少し口に含んだ。

「今日はどんなご相談内容だったんですか」

興味を持ったチヨンサはダーヨに聞いてみた。

「今日ですか、今日はどちらかというところ心の問題で、自分の将来が不安だというものでしたね。よくある話です」

また一口お茶を含んだ。チヨンサも自分の未来が不安であった。今はダーヨの元で働いているが、この後どういう人生プランでやっていこうか。

「先ほどの方が言うには、今の仕事に別に不満はないが、どうもパッション溢れるあふれるような形で熱中できていないようです。それもあって、スキルの向上もあまり見込めていないようです。それをずっと続けて自分は幸せになれるかどうか、不安なようです」

「ダーヨさんはどんなアドバイスをされたのですか」

チヨンサはそういった漠然ばくぜんとした不安の相談に、ダーヨがなんと答えるか興味きょうみがあった。

「私からは、まず今仕事があることに感謝した方がいんじゃないかと言いました。あの方が言うには、ご自分の興味がある分野があるそうなので、それを隙間時間すきまを使って極めて、それを自立できるようにしなければいいのでは、とお話ししました」

確かにそれはそうなのだが、本当にそんなことができるのか、懐疑的かいぎてきであった。

日中は仕事をしっかりやって、今の基盤きばんは継続けいぞくさせる。そして空いた時間を使って自分の好きなことをしてスキルを磨く。そして磨き切ったら、自分の好きなことにシフトさせる。確かに非の打ち所がない戦法だが、チョンサの心は晴れなかった。完璧すぎて何か釈然しやくぜんとしないのだ。

「先まで考えすぎなのさ」

お昼の休憩時間となり、チョンサは事務所を出てプラプラと街を歩いた。そして三毛猫のムネマと会った。

「おう、チョンサじゃねえか」

この言葉を発したのは人間ではない、猫のムネマである。先ほど言ったようにぶつかってから、お互い猫語と人間語がわかるようになってしまったのである。

「やあ、ムネマさん、お疲れ様です」

チョンサはお人よしだが、まさか猫にまで敬語を使うとは。もう敬語を使うのがデフォルトになってしまっているのである。

「どうした、浮かない顔をして」

いや、、、、と言いながら、チョンサは先ほどダーヨが面談めんだんしたお客さんの話をした。

「ふうん、将来の話ねえ。なんか人間って、本当にいちいち悩むよな」

「ムネマさんはあまり悩まないのですか」

猫のムネマは地面にゴロゴロと横になりながら、面倒くさそうにチヨンサに言った。

「そもそもおれたち猫はお前ら人間ほどは生きられない。人間は長生きしすぎなんだよ。だからあんまり何十年も先のことを考えたりはしない。今日、どれだけダラダラと生きられるか、美味しい飯が食えるか、それだけなのさ」

そう言うと、ムネマはあくびをして、さらに伸びをした。そして気持ちよさそうに目をつむった。

その様子を見ながらチヨンサはムネマを羨ましく思うらやましくった。ムネマは野良猫だが、街に行けば残飯があったり、誰かから餌を恵んでもらったりと、食うに困っている様子ではなかった。

そしてお腹が満たされると暖かい場所を見つけてそこでゴロリと横になる。そして気持ちよさそうに寝ているのである。

それに引き換え人間は、あくせくと働き、顔に苦渋くじゆの色を浮かべ、毎日働いている。

人間が生物のピラミッドの頂点にいるのではなかったのか、どこかで逆転してしまっていないかと、チヨンサは懐疑的になった。

「まあ、あんまり悩みすぎるなよ、人間さん。今を楽しもうぜ」

そう言ってムネマは眠ってしまった。

今を噛み締める

家に帰って、チヨンサは日記を書き始めた。これはチヨンサの習性しゅうせいで、毎日日記を書くのであった。

「○月○日 晴れ

今日、ダーヨさんの元にあるお客さんが相談をしにいらした。今の仕事に不満はないが、情熱がなかなかそそげないとのこと。このままこの仕事を続けることに将来の不安を覚えているとのことであつた。

猫のムネマさんは、人間は長寿すぎて、将来のことを考えすぎだと言っていた。確かに人間、考えすぎなところはある。

一方ダーヨさんが言うように、隙間時間をうまく使って自分の好きなことでスキルを磨いて、ゆくゆくはそちらにシフトしていく方法もあるだろう。

でもなんだかぼくは釈然としない。この釈然としないのはなぜだろう」

ここまで書くと、チヨンサは家の窓を開け、涼しい風が入ってくるのを感じた。

ふとチヨンサは気づいた。今、幸せだなと自分が感じたことに。

今日も日記が書いて、今涼しい環境に身を置けている。これって幸せなんじゃないか？

求めすぎるとつらくなる。今を大事に、というより、今を感じるといふ感覚がとても大事な気がした。

その時、窓の外からニャーという声が聞こえた。まさかムネマかと思ったが、それ以上は詮索せんさくしないようにした。

そして窓を閉め、床に入った。

今を感じる、今を噛み締める。それがとても重要な気がした。

第2章 成果を出す4ステップ

最近多い、将来の悩みを抱えるお客さん

今日、ダーヨの元に占いと言う名の相談をしに来たのは若い女性であった。

相談部屋から漏れてくる声で、チョンサはあらかたその相談内容がわかってしまった。

その人は、前回来た人同様、将来が不安とのこと。

現状に不満はないが、この人もやはり、自分の好きなことで大成したいたいせいと思っているが、なかなかその芽が出ず、悩んでいるとのことだった。

ダーヨは言った。

「そうしたら、具体的に、成果が出るようになる4つのステップを教えましょう。それは・・・」
ここは重要な箇所だ。そう思ったチョンサは相談部屋とチョンサがいる部屋のドアに耳をつけ、その内容をなんとか聞こうとした。

しかしドアにつけた反対の耳から、「にゃーん」という聞いたことのある鳴き声がした。

振り返ると、そこには三毛猫のムネマが、空いた窓から入ってきているではないか。

「なんですか、ムネマさん、勝手に入ってきて・・・。今からいいところなんです」

小声でチョンサはムネマに話しかける。ムネマはそんなことはお構いなしの様子で、あくびをして言った。

「なんだよ、そんな変態みたいにドアに耳をつけて。なんだ、盗み聞きか？」

「べっ、別に盗み聞きじゃないですよ。ただ、ちょっといいアドバイスをしそうだから、ちょっと聞こうかなあって」

少し焦るチヨンサを尻目に、ムネマがぼそつと言った。

「それを盗み聞きと言うんだよ」

盗み聞きする4ステップ

幸いにも、チヨンサとムネマが話をしている間に、その、成果を出すための4つのステップの話はまだされていなかった。

ダーヨが言った。

「自分の好きなことで成果を出すための4つのステップ。まず一つ目は、成功したイメージをありありと頭に思い浮かべることです」

「成功したイメージですか・・・」

あんまりしつくり来ていないようで、相談者の女性は言った。

チヨンサとムネマは顔を見合わせた。

「なんだなんだ、なんの話をダーヨのおっちゃんはしてるんだ？」

混乱した三毛猫のムネマはチヨンサに言った。

「人間が自分の夢を叶えるための方法について、教えているんです。

一つ目は、成功したイメージをありありと思い浮かべることだそうです」

「なんだ、別にそんな難しいことじゃなさそうだな。たとえばおれだったら、あの魚屋からサンマをかつぱらいたかったら、そのかつぱらうイメージをすればいいってことだろ、簡単じゃねえか」
簡単じゃねえかに答えるが如く、ダーヨは相談者に補足した。

「イメージするだけ？そう思ったかもしれませんが。しかしちゃんとイメージするのは難しいものです。心のどこかでどうせ出来っこないと思ってしまうのが、悲しいかな、人間というものです」
少し寂しげにダーヨは話した。

ドア越しにその話をこっそりと聞いているチョンサは、

「確かに、ダーヨさんの言う通り、イメージはできてもそれを本当にできると信じ切るのは案外難しいかもしれないですね。」

どうせダメだろうとか、この前もダメだったとかそういうことを言い訳にして、ちゃんとイメージしていないかもしれません」と言った。

それを聞いたムネマも、

「確かに魚を魚屋からかつぱらうときも、前に失敗した店でもう一度かつぱらおうという気にはならねえな。やつぱりそれは失敗したイメージが、頭の中にこびりついているからかもしれないねえな」
と、独りごちた。

ダーヨの話は続く。

「ちゃんと自分を信じ、成功イメージを確信できるところまで頭で想像できたら、第二ステップに続きます。それは、勇気を持ってそれを実行することです」

こっそり聞いている二人組、チョンサとムネマもひそひそと話した。

「確かにダーヨのおっちゃんの言うように、イメージしただけだと意味ねえな。魚屋から魚をかつぱらうイメージがちゃんとできたんなら、それを実行に移さねえとな。なにもしなければ、腹は膨らまねえ」

そう言うムネマを見ながら、「そんなに生きるために盗みを働くなら、もう少し彼にエサを与えようか」とチヨンサは思った。

続いて三つ目、とダーヨは続けた。

「三つ目は行動した後、ちゃんとそれを振り返ることです。この振り返りをしない人が多すぎます。

イメージした、勇気を持って行動した、ならばその結果を振り返るべきです。ちゃんとイメージできた通りにできたのか、それともできなかったのか。できなかったのならなぜそれができなかったのかを考察する。自分の中で腹落ちさせることが重要なのです」

チヨンサはそれを聞きながら、自分の中でも思い当たる節ふしがあった。

確かに衝動うげんに駆かられ、今までも行動したことはあった。しかしあまり振り返りをした覚えはない。

この振り返りをしないと、また衝動に駆られてしまい行動する。そしてその繰り返しになってしまうのだ。一度ピリオドを打つ意味でも、イメージし実行した後の振り返りは重要だと思った。

そして最後は、とダーヨは相談者の女性に話をした。

「最後は、それができた自分を褒めるほめることです。悲しいかな、なかなか大人になると誰も褒めてくれなくなります。子どもの時は親や先生、年上の人たちが褒めてくれたでしょうが、大人になると途端とたんに褒めてくれなくなります。

ですから、ちゃんとイメージ、計画し、勇気を持って実行。そしてそのままにせずちゃんと振り返りをした自分を褒めてあげることが重要です。そうしないと、自分自分がそっぽを向いて、うまく動い

てくれなくなります。

今まで話した4つのステップを、自分の好きなことに対し行うのです。そうすれば成果は必ず付いてきます」

猫のムネマは今までの4つのステップを暗唱あんしょうした。

「4つのステップ。イメージ、行動、振り返り、そして自分を褒める。なんだ、人間ってのはこんなことを考えながら生きていやがんのか。まったく面倒くさいことをするなあ」

チヨンサと一緒にドアに聞き耳を立てていたムネマであったが、少し拍子ひょうしめけ抜と言った感じで、ドアを離れ、窓際にさっと飛び乗り、目をつむってしまった。

時刻は三時。ムネマはお昼寝タイムに入ってしまったようだ。

しばらくして相談者とダーヨは相談部屋から出てきた。

相談者の女性は、来た時よりもなにか収穫しゅくかくがあったような顔で、事務所を出て行ったのであった。

その日のチヨンサの日記

「○月○日 晴れ

あまりよくないことだとは思いつつ、ダーヨさんの元に占いに来た人の話を少し聞いてしまった。この人も自分の将来に自信が持てないらしい。最近こういった相談をしに来る人が多い気がする。みんなどうしてしまったのだ・・・。

ダーヨさんは相談者さんに、成果を出すための4つのステップを教えていた。まず成功のイメージをしっかりと頭で思い描くこと、そしてそれを勇気を持って実行する。そしてちゃんと振り返りをする。最後にそこまでのステップをちゃんと実行した自分を褒めるというもの。

この流れを自分の好きなことに対し、愚直に行なっていけば成果は必ず出るというもの。ぼくもこの四つのステップを意識して、明日から取り組んでみよう。

D.S. ムネマさんはいつも自由に事務所に来て、ひとしきり話してお気に入りの日当たりのいい窓辺で寝てしまう。なんて呑気な猫^{のんき}だろう。いや猫なんてみんなそうだろう。ぼくら人間くらいだ。こんな

にいちいち意識して生きているのは。
4つのステップで頑張ってはみるけれども、ムネマさんを見習って適度にサボりつつやろう、^{かんきゆう}緩急は
だいじ、だいじ」

第3章 結果が出ない！

なぜ成果が出ない

今回から、ダーヨと相談者との面談に、チョンサも同席して良いことになった。

もしかすると、前回三毛猫のムネマと一緒に立ち聞きしていたのがバレたのかもしれない。

しかしダーヨはなにも言わず、「同席していいですよ。一緒に聞いた方が、あなたの勉強になるかもしれない」と同席を許してくれたのだ。

そして、今回の相談者は、色々と努力はしているけれども、なかなか成果が出ずに困っているという話であった。

実はその人は二回目の相談で、前回の、成果を出す4ステップをダーヨから教えてもらっており、実践^{じっせん}しているのだが、成果が出ないということで、若干^{じゃっかん}クレームっぽい感じで、今回訪問してきたのであった。

その人はかなり若い方で、勢いのある男性であった。席に着くなりダーヨに食ってかかった。

「どういうことですか、ダーヨさん。あなたのアドバイス通り成果を出す4ステップを何年も試みましたが、まるで効果が出ません。ぼくが費^{つい}やした時間を返してください！」

どうしたものかと、横にいるチョンサははらしながらダーヨを見ると、ダーヨは落ち着き払った様子で、言葉を返した。

「あなたはどれくらい努力したのでしょいか」

「この4ステップをどれだけ実践したかということですか？もう五年やりましたよ。五年ですよ、五年。それだけやって成果が出ないなんて、きつとこの方法が間違っているんだ」

ダーヨは口元に手をやりながら、その若者に答えた。

「私が教えた4ステップを一度復唱してもらえますか」

若者はイライラしながら答えた。

「まずは成功のイメージをしつかりと頭の中で思い浮かべる。イメージができたならそれを勇氣を持って行動する。そして振り返る。最後にそれができた自分を褒める。合っているでしょう？」

確かにその若者が言っていることは、ダーヨが教えた内容と一致していた。

つい最近この4ステップの話を聞いてから、チョンサもこれを実践していた。しかし五年もやって効果なしとなれば、この4ステップを続けるかどうかチョンサとしても疑いの眼差しを、ダーヨに向けてざるを得なかった。

「ちなみに、その、あなたの努力していることとは、一体なんでしたっけ」

ダーヨは落ち着きを保ちつつ、若者に尋ねた。

「ぼくが頑張っていること。それはある工芸品を作ることです。そしてそれを売って、生活を成り立たせることです。しかし良い工芸品をいくら作っても、誰も買ってくれない。きつとこの良さがわからない馬鹿者ばかりなんだ」

若者は怒りをぶちまけていた。しかしチョンサはこの若者を嫌いにはなれなかった。

努力しても報われない。誰からも褒められない。そんな生活が五年も続いたら、自分だったとしても耐えられないだろう。

猫視点の意見

と、その時、面談部屋の空いている窓から、三毛猫のムネマがそろりと部屋に入ってきた。

「あらあら、この猫ちゃんですね。この近所の野良猫ですね」

ダーヨは笑みを浮かべて猫の侵入を許した。そしてムネマはチョンサのそばに座った。

「よう、チョンサ。なんだよ、この部屋の空気は。なんかこの若い兄ちゃん。えらい威勢いせいがいいな」ムネマはチョンサに話しかけたが、猫語が理解できるのはチョンサだけである。周りの人間からは猫がにやんにやんと言っている風にしか聞こえない。

チョンサもムネマに話しかけたのだが、猫に話していたらダーヨと相談者さんがぎよっとするだろう。チョンサは目でムネマに訴えうったえかけかけた。今は喋しゃべれないですよ、と。

それを分かったのかどうかは分からないが、チョンサから返答がなくても特に気にせず、チョンサの横であくびをしたのであった。

「ぼくの努力はきつと報われないんだ。ぼくはこの工芸品を作るという好きなことで、一生食っていけず、嫌な他のことをして生きていかなければいけないんだ」

相談者の若者は今にも泣き出しそうであった。

そんな若者を見て、ムネマはぼそつと言った。

「なんだよ、馬鹿馬鹿しい。重く捉えすぎなんだよ。あと努力したって言うているけど、本当にこの兄ちゃんお兄ちゃんは努力したって言えるのかね」

どういうことですか？という不思議な顔をチョンサはした。ムネマは話を続けた。

「おれは昔負った傷が原因で、左の後ろ足がうまく動かねえ。普段の生活は送れるが、いざ獲物を狙おうとした時は、昔に比べて速い動きができなくなっちゃった。」

それでもおれは野良猫だから、獲物を取って生きていかなきゃならねえ。でも体はうまく動かねえ。

そんなとき、おれは考えた。どうすれば体は遅くても獲物を捉えられるかってな。死に物狂いのその果てに、おれはある方法を編み出して、獲物を取れるようになった。その死に物狂いさがこの兄ちゃんからは感じられねえな」

ムネマは少し冷たい眼差しで、相談者を見てそう言った。

生き死にかかると、生き物の集中度合いは飛躍ひやく的に向上する。この相談者さんは夢に向かって動いているが、今生きている様子を見ると、他に仕事もあって収入もあるのだろう。

それに比べてムネマは野良猫。収入なんていう概念はない。自分で餌を調達しなければならぬのだ。人間と野良猫、二つの生き物には生死に関するギャップが大きくあるらしいと、チョンサは思った。

努力の方向

しばらく黙っていたダーヨは再び口を開いた。

「厳しいことを言うようですが、おそらく努力が足りないのだと思います」

なんとダーヨもムネマと同じことを言った。しかもかなりストレートに。当然相談者は反撃をしてきた。

「なんですって。ぼくの努力が足りない？なんて言うことを言うんですか。ぼくは努力していますよ、例えば……」

そうやって毎日のルーティーンを相談者の若者は話し、いかに自分が時間を有効活用しながら自分の夢の方に時間を注いでいるかを熱弁した。

それに対し、ダーヨは冷静に言った。

「すみません、言い方を間違えましたね。努力が足りないのではなく、努力の仕方が誤^{あやまっ}っているんだと思います。」

努力というのは継続することです。あなたは確かに継続することはよくできていて、すばらしいと思います。

こうイメージしてみてください。あなたは車に乗っている。あなたの役目は車にガソリンを入れることと、ハンドルを握り、アクセルとブレーキをうまく使い分けながら、ゴールを目指すことです。

あなたは長い時間、ガソリンを絶やすことなく補給している。もちろんガソリンはタダでは手に入りません。ガソリンを得るために他の仕事をし、ガソリンを買って補給をしている。あなたはそれを五年も続けている。その継続力、努力は賞賛^{しょうさん}に値^{あた}います。

そしてあなたはハンドルを握り、自分が作った工芸品をみんなに買ってもらって生活を維持するという夢、目標に向かって車を走らせている。しかし五年も同じことをするがそこに到達していない。いや、どれだけ進捗をしているかも分からない。そんな感じでしよう?」

尋ねるダーヨに、相談者は口をあんぐりと開けて、うなづいた。

「そうです、そうですとも。まさにそんな感じです。霧^{きり}の中を歩いているようで、ゴールが見えず、もう泣きそうな状態なんです」

若者は切実にダーヨに訴^{うった}えかけた。ダーヨは話を続けた。

「もしあなたがこの状態、つまり霧に包まれたようで、自分のゴールに向かって走れているか不安なとき。その時はゴールを分ける必要があります」

「ゴールを分ける？」

そう、つい言ってしまったのは、チョンサの方であつた。ゴールを分けるとは一体どういうことなんだろう。

「なるほどな」

そう言ったのは猫のムネマである。えっ！と驚いてチョンサはムネマを見ると、ニヤリと笑って答えた。

「この兄ちゃんは欲張りすぎなのさ。おれの例で言えば、足が悪くても獲物を取りたい。それがゴールだとするだろ？でもなかなか獲物が取れない。これが現状だ。」

普通、獲物を取りたい、でも頑張っても取れない。どうしよう。となつて絶望して、本当に獲物が取れないと、弱肉強食じゃねえけど、死んでいく。

まず獲物を取りてえんだつたら、獲物にどういう習性があるのか。そもそも自分が狙う獲物はなんなのか。スズメなのかカエルなのか。まずターゲットを絞る必要があるんだよ。

スズメだつたら狭いところに誘い込んだほうがいいのか、カエルだつたら夜狙つたほうがいいのか、まあ、野良の知識として色々あるんだよな。

だからこの兄ちゃんも頑張るやる気があるんだから、まずはなんかを誰かに売りてえと思ったら、誰に売るかっていうことをもうちつと考えたほうがいい気がすんな。・・・まあ売るっていうことがよくわからねえけど」

ムネマの説明が終わるくらいに、ダーヨも話を始めた。

「ゴールを分けるとは、まず、もう少し細分化したほうがいいということです。

あなたの話を聞いていると、誰でもいいから買ってくれ、と聞こえます。

そうではなくて、どんな人を買って欲しいのか。相手の立場になって考えてください。あなたは工芸品を買いますか？その人はなぜ買うのか。そこをもっと考えるべきだと思います。

自分のはいい商品だ。だからみんな買っていくはずだ、は、かなり短絡的たんらくと言わざるをえません」

ピシヤリとダーヨは言い切った。

若者はぐうの音も出ない様子であった。

その日の面談は終わり、相談者は帰って行った。

その日のチョンサの日記

○月○日 曇り

今日の相談者さんは、努力しても成果が出ないというお悩みを持つ方だった。

自分が正しいとと思っていることを続けるのは実際すごいと思う。でも客観的に見ると実はそれだと全然足りていないということももちろんあると思う。

それを受け入れるのがすごい難しいだろうな。だって自分がやってきたことを何か否定するような気がするから。

それでも成功をするためにはそれを乗り越えないといけないのかな。成功するってなんて大変なことなんだろう。

成功するための、隠し味

そこまで日記を書いたところで、窓からにゃおんという声が聞こえた。なんとそこにいるのはムネマであった。

「よう、こんばんは。なんか寝れなくてよ。つい来ちまった。お邪魔だったかね」

「いえ、大丈夫ですよ、ムネマさん。お昼はお話できずにすみませんでした。さすがに猫と、人間の前で話すのはね」

そう言っ、はははとチョンサは笑った。そして少しため息をついた。

「今日の話、なにかぼくは釈然としません。あの相談者さんの努力を否定してしまった気がします。」

あの人は全然悪くない。逆にとても頑張っている人だ。報わ^{むく}れてほしいものです。うーんと言っ、からムネマは言った。

「まああの兄ちゃんはあるまり気負いせず、もっと気楽にやったほうがいいと思うけどな。自分は才能がない、ダメなやつだ。だから時間を使っても全然成果が出ないんだとかは思わないほうがいいな」

「でも実際自分を責めてしまう人は多い気がしますけどね」

チョンサは少し落胆^{らくたん}した様子で、ムネマに話した。それだけ努力しているのに成果が出ないことで、モチベーションの低下はひどいものだと思っ、ていた。

「でもよ、チョンサ。お前は猫と喋れるようになるっ、思っ、てたかい？」

ムネマからの意外な質問に、少し面くらいながらも、チョンサは答えた。

「まさか、まさに青天^{せいてん}の霹靂^{へきれき}。そんなことが起きると思っ、てもみませんでしたよ」

青天の霹靂はよく分からなかったようだが、ムネマは答えた。

「そうだよな、おれもだ。人間と喋れるようになるなんて思ってもみなかった。だから世の中何が起きるか分からねえ。だから何かしたいんだったら、諦めないで続けるってのもそれはそれで正しいと思うんだ」

確かにそうなのかもしれない。あの若い相談者さんが帰る時、ダーヨは優しく言っていた。

「あなたの努力は決して無駄にはなっていません。今は成果が出なくて辛いでしょう。でも決して諦めないことです。というより、あなたが本当にしたいことであれば、どれだけ辛くてもあなたは決して諦めないでしょう。逆に諦めてしまう夢だったら、それまでということですよ。少なくとも私はあなたを応援しますよ。また悩んだらここに来てください」

そう言ったダーヨに対し、相談者さんは「ありがとうございます」と深々と頭を下げていた。

多分また悩みを抱えたらあの若者はここに来るだろう。ダーヨを求めて。そういった意味だと何か成功のヒントは、誰かから「ありがとう」と言われることのような気がして、ならなかった。

第4章 頑張りのご褒美

疲れているチョンサ

今日のダーヨへの相談については、チョンサは出席しないことにした。

面談時間は一時間ということで、その間休憩をもらって、近くの川で腰を下ろしていた。

事務所から出る時に、猫のムネマもついてきた。一人と一匹はお互い何も言わず川まで歩き、腰を下ろした。

空は曇っている。空気も湿っているし、この後少し雨が降るかもしれない。

チョンサは手頃な小石を握り、川に投げたが、一回も飛び跳ねなかった。

「どうした、なんかお前、疲れてねえか？」

少し不安に思ったのか、猫のムネマはチョンサを気遣った。

なんだかんだ二人は長い時間を共にするようになってきて、なんとなく相手の調子が良くない時は、それに気づくくらい親密しんみつになっていた。

今日のチョンサは元気がない。いつもだったら積極的に面談に同席するのに、その時間を休憩に当てている。

それにムネマは気づいていた。チョンサは精神的に疲れると自然に触ふれなくなる傾向があると。

この川は特にチョンサのお気に入りで、疲れた時はしばしばここに通っていることを、ムネマは知っていた。

なんとなく沈しずんだオーラを纏まとったチョンサは、また手頃てごろな石を探し、そこらをかがんでいた。

「正直、なんだか疲れちゃったんですね」

チョンサは二つ目の石を探し当て、川に投げた。

「ぼくはぼくなり頑張っています。たまに成果は出るけど、なんだか疲れてしまつて。休息の取り方がうまくないのかなと思うんです」

確かにムネマはそれを感じていた。

チョンサは真面目すぎる。仕事にも家庭にも一直線だ。そして何かうまくいかないことがあると、自分に責任があるとして、自分を責める傾向がある。

「お前さんは真面目すぎるんだよ。Take it easy (テイク イット イージー)。もっと気楽にやんなよ。これだから真面目な人間は苦手だぜ」

そう言つて、ムネマは回れ右をして街に戻つて行つた。

チョンサはしばらく石を探しては川に投げていたが、うまく石が跳ねず、しばらくそうしてから断念して事務所に戻つて行つた。ちょうど一時間が過ぎようとしていた。

リラックスする時間

しかし事務所に戻つたはいいが、ダーヨの姿はなかった。その代わりに相談者さんがまだいた。

「あれ、ダーヨさんはどうしたんでしょう」

今回の相談者はチョンサと同じくらいの年代の四十代の男性。小太りというところも、チョンサそっくりだ。

「ええ、私との面談が終わった後、足早に出かけて行きましたよ。何やら用があるとのこと。私はしばらく言われたことを考えて、そろそろおいとましようとしていたところですよ」
相談者は荷物をまとめ事務所のドアに向かった。

そこまで付き添った際、チヨンサはその男性に聞いてみた。

「いかがでしたでしょうか。今日の相談・・・いや占いは？」

男性は少し笑みを浮かべた。

「ダーヨさんにはとても親身になって相談・・・いえいえ占いでしたね。占いをしていたきました。とても身になる話でしたよ」

途端にチヨンサはこの男性がうらやましくなった。この人は悩みを一つ解決し、前に進もうとしている。

それに比べ自分は何か成長ができているのか。成長ができたこの男性を、とても羨ましく思った。

「ちなみに今日はどんな相談内容だったのでしょうか」

自分がその面談に参加していれば聞かなくてよかった質問だが、ついチヨンサは気になって聞いてしまった。

「今日の悩みは、私が自分を責めてしまうことです。小さなことから大きなことまで、すぐ自分のせいで、自分を責めてしまふんです。それをどうにかしたくて、ダーヨさんの占いに来たというわけです」

「どのようなアドバイスを受けたんですか」

チヨンサは自分もぜひ知りたいという気持ちが強くなってしまい、続いて聞いた。

「ダーヨさんからは別に自分を責めるのは悪くないと言ってくれました。それよりもっとリラックスする時間を取った方がいいと言われました」

「リラックスの時間ですか」

二人はもう玄関まで来ていたが、しばらく立ったまま話を続けた。

「ええ。だいたい私の平日の予定が朝に家のこと、いわゆる子ども世話や洗濯などの家事を妻と分担して行い、その後仕事に行っています。」

そうして夕方になって帰ってきてまた子どもの世話をして家事をして、すぐに就寝という形を取っています。それを平日は五日あるので五回連続で行うんですね。

そして休みが二日あるのですが、ほぼ育児と家事が終わって、また平日が始まるとこんな感じなんです。人に話して分かったんですが、自分の休憩時間がほばないんですね」

実はチョンサの生活もほばこの男性と同じであった。妻と育児と家事を分担しながら仕事をして、休日も家族と過ごす。家族と過ごせるのは本当にありがたく幸せなのだが、この生活リズムだと一分も自分の自由時間がなく、^う疲れたという感情がどうしても拭いきれなかったのだ。

「ですので、なるべく何もせずゆっくりリラックスする時間を意図的に設けることにしました。それこそスケジュール帳に書き込むくらいの勢いで、ちゃんと休息を予定する。ダーヨさんに言われて気づきましたが、私は休息を取ることを舐めていたんだと思います」

確かにチョンサの中でも休息や休憩は、サボることと同義の意味な気がして、なんだか積極的にやってはいけないものだと思っていた。

しかし実際、そんな張り詰めた生活を送っていても、疲れるだけだ。もっと休息を積極的に取らないといけない。

二人は話し終わり、チヨンサが事務所のドアを開けると、相談者の男性は深々とお辞儀をし、街の中へと消えていった。

今日の日記…意識的に手を抜く

○月○日 くもりのち雨

最近ぼくは元気がなかったのだが、働きすぎだったのかもしれない。

仕事をして家のこともやって、自分の趣味も隙間時間に行く。そんな生活をずっと何年も続けていく。

なんだか油を差していないブリキのおもちやのようだ。パツパツに詰めるのではなく、油を差して休憩をさせることが重要な気がする。

そういえばダーヨさんもムネマさんも結構だべっている時間が多いように見える。

ダーヨさんは仕事の時間は本当に短いし、ムネマさんもほとんど寝ている。

ぼくももっと、人間と猫、どちらにもいい手本がいるので、参考にし、もっと休憩を取ろうと思う。

第5章 自責と他責の境界線

自分が悪いのか、他者が悪いのか

今日もダーヨの元に占いに来た人は、深刻な顔をしていた。

すでに先ほど相談は終わり帰っていったのだが、精神的にしんどい様子であった。

今回はチョンサもその面談に立ち会ったのだが、その相談者は、ある事柄について、自分が悪いのか、それとも他人が悪いのか、その境界線のことで悩んでいるということであった。

ある事柄とは、主に仕事のことのようなのだが、その相談者がやっている仕事の範囲を超えたところで、相手方から文句を言われることがあるらしい。

その相談者は蜂を飼育して、その蜂蜜を売って稼ぎを得ている会社の一社員で、彼の主な仕事はできあがった蜂蜜を売りに行く仕事をしていた。

それで蜂蜜を売るときに、相手から、この間より品質が落ちていると文句を言われたらしい。相談者はすぐに相手に謝って、会社の方にこのことを報告した。

しかし会社からは、今はこの蜂蜜の品質が限界であり、昔よりは確かに質は落ちているかもしれないが、これ以上は上げられないという。

それでも相談者は会社から、その蜂蜜を今までと同じ金額で売ってくるよう指示を受けており、困り果てているということであった。

ここで自分が悪いのか、他人が悪いのかという話なのだが、客観的に見れば、相談者に落ち度は全くない。どちらかというと、会社とお客さんの双方に挟まれ、かわいそうだとチョンサは思った。

しかしこともあろうに、この相談者は自分を責めてしまうのだという。

自分がもっとお客さんに接していい印象を得ていれば、たとえば品質が悪かろうと売れるのではないかと。もっと自分を改善すれば売れるのではないかと自分を責めてしまうのだという。

客観的に見ればそんなところまで相談者がする必要はないと思ってしまふ。しかしこの相談者はお客さんと会社、どうにかWingWing（ウィン・ウィン）にしようと思に挟まれ、頑張ってしまうとのことであつた。

ただ、それかなり心労しんろうが重なるところで、お客からは品質を上げる、会社からは今までと同じ価格で売ってこいと言われ、ヘトヘトになつてしまひ、占いという体ていで、ダーヨに相談しに来たというわけであつた。

力を抜いて、続けてみる

ダーヨはまず客観的に見て、相談者に少しも悪いところはないと、釘くぎを刺した。その上で一つアドバイスをした。

「あなたには一つも悪いところはありません。両者の間をなんとか保とうと頑張っている。その行為は素晴らしいものです。本来は会社のせいになりたいところをなんとか頑張つて踏みとどまっている。その行為は素晴らしいです。」

しかしこのままだと両者に挟まれ、あなたがつらいでしょう。ここで一つアドバイスがあります」
ダーヨは一呼吸置いてから、話を続けた。

「いわゆる、自分で変えられる部分を内部環境、どう足掻いても変えられない部分を外部環境と呼ぶことにしましょう。」

あなたがどう頑張っても、いきなり会社が蜂蜜の品質を上げるとは難しいでしょう。これを外部環境と呼びます。

一方、そういう状況であったとしても、あなたはその品質の低下の理由を説明したり、なにか他のプロモーション方法を使って製品を売ったり計画することはできるでしょう。これを内部環境と呼びます」

自分でどうにかできる範囲が内部環境、どうにもできない部分を外部環境と呼ぶらしい。チョンサはあからさまにメモは取れないので、頭の中で復唱した。

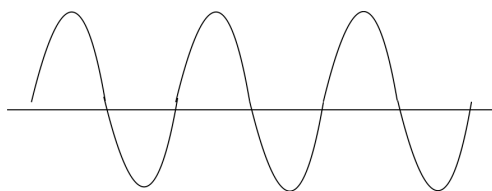
「あなたはどうかやら内部環境を使って、どうかその環境を変えようとしています、何事も限界があります。自分がどう足掻いても無理そうであつたら、あきらめて、もう流れに身を任す。そのくらの脱力だつりよくをした方がいいでしょう」

「脱力ですか、なるほど」

確かにその相談者は、自分がどうかしなければいけないと、肩に力が入っている感じだった。脱力というキーワードを聞いて、相談者はふうと息を吐き、脱力を試みている様子であった。

「しかししばらくするとあなたは思うでしょう。脱力して多少リラックスしたところで、問題は解決しない、どうすれば良いのか、と」

その通りで、頑張ってもどうにもならない、じゃあやめたと物事をあきらめられればどんなに楽か。そういうつらいことがあっても、我々は食っていかなければならない。物事を放置したままでは済まされないのである。



頑張る

でも続ける

手を抜く

「あきらめて身を任せても問題が全然解決しないとき、どうすればいいのか。実はさっきとやっていることが矛盾しているかのようですが、あきらめずに続ける、ということなのです」

チヨンサの頭には????と?が三つくらいついた。

結局あきらめない?さっきは潔くあきらめて身を任せようと言っていたが、どうということなのか。「つまり、どうにもならない環境においては、頑張ってみたり、ときにはあきらめて力を抜いたり、それで少し休憩が取れたらまた頑張ったりと、波のように行くことが重要なのです」
そういうと、ダーヨは部屋にあった黒板に波の図を描いた。

「まるで息をしているみたいだな」

驚いて部屋を見渡すと、なんと猫のムネマがいつの間にかいて、相談者の横にちょこんと座り、ダーヨが描いた波の図を見ていた。

「息を吸ったり吐いたり、猫も人間も、吸ってばかりじゃだめ、吐いてばかりでもだめ。やっぱり吸って吐いてと逆のことをしねえと生きられねえ。」

頑張るだけでもだめだし、怠けているだけでもだめ。結局どっちも同じくらい必要だってことなんだろうな」

確かに、頑張りと脱力。どちらかだけでもだめで、両方必要な要因だ。

それにチョンサが思ったのは、呼吸も吸って吐いてと逆の行動をするが、ポイントはそれを^づ続けていることだ。吸って吐いて、また吸って吐いて。これの繰り返し、つまりやめないことが呼吸の重要な鍵である気がした。

チョンサの日記

○月○日 晴れ

今日の相談者さんの話も参考になった。ぼくにも時々、これは自分が悪いのか、それとも他人が悪いのかと線引きを引きたくなる。

自分が悪くない時は相手に改善^{かいぜん}してもらいたいと思う。でもそう明確に線を引けるところは少なくて、自分の頑張りでこれは改善できるんじゃないかと、自分の頑張りで力^{ちから}バーしようとする時がある。

でも別にそれは悪いことではなくて、逆にいいことだと思う。

問題なのは頑張りすぎることで、それに結果が出ない時に自分を責めてしまうこともよくないことだと思う。

そもそも自分の責任（ダーヨさんは内部環境と呼んでいた）として、その物事の改善にあたることは素晴らしい行為だと思う。ほぼ全ての人は外部環境（自分ではどうしようもできない状況）だとして、改善をあきらめてしまう。しかし勇敢にもその改善にあたろうとしていることは、賞賛しょうさんに値するあたと思う。

ムネマさんも言っていたが、頑張りと思抜き、両方必要なんだと思う。それに続けること。その続けることについては、まず自分を責めない、攻撃しないという点が、ひどく重要だと思った。

第6章 脱力のしかた

チョンサ、ダウン

今日、せっかくまた、相談をしている場面に同席して良いということだったのに、チョンサはなんだから上の空であった。

最近は一頑張る場面とあえて力を抜く場面と、両方作るようにしていたのだが、それでもなんだか疲れが取れていないような気がしていて、頭がぼーとしてしまうのだ。

何かをやっている、どこか目はうつるで、人の話を聞いているのか聞いていないのか、よくわからない様子であった。

相談者はもう来ていて、何やら必死にダーヨに相談をしている。

しかしそれも今のチョンサにとっては、すごい他人事で、正直どうでもいい風に映ってしまっていた。

ふと窓を見ると、窓辺で猫のムネマがこれまた気持ちよさそうにくつろいでいる。

陽の光が気持ちいいのか、両目をとじ、丸くなってすやすやと寝ている。

と思うと、目をパチリと開け、あくびをしながら伸びをした。

そうしてまた目を閉じて寝てしまったのである。

これこそ、脱力というか、リラックスの境地というもののような気がした。

チョンサは自分を振り返ってみて、どうやら脱力すること自体を頑張ってしまったらしいことに気付いた。

休むことが苦手なチョンサは、ちゃんと「休むぞ」と意識しないと休むことができない。それを意識してしまっているからこそ、精神的にもリラックスができない状態が続いてしまっていたのである。

その日の相談も無事終わり、明日は休日であった。チョンサは足早にダーヨの事務所を退社し、家路に着くのであった。

体が動かない

休日のその日は、朝もなんだか心が晴れず寝過ごしてしまった。

子どもたちは元気に遊んでいるが、昨日に引き続き、チョンサはなんだかぼーとしてしまっていた。その状態は夕方近くまで続いた。いつもはテキパキと家事をこなすチョンサだが、体が重く動かないため、妻が家事をこなしてくれていた。

申し訳ないと思いつつも、どうしても体が動かないので、ベッドで横になっていた。体力はとうに回復しているはずなのに、体がぴくりとも動かなかった。

このまま動けなくなってしまうたらどうしよう。そう思った時であった。ふと自宅の窓辺を見ると、また猫のムネマがいた。全くプライベートなんてあつてないようなものである。

「よお、チョンサ。また元気がなさそうだな。また頑張りすぎたか」
ニヤニヤと笑っているように見える。チョンサは少しムツとした。

「そんなおかしいことじゃないですよ。なんだか頑張りどリラックスを両方取るように、それこそ頑張ってしまったみたいで、少しダウンしているだけです。もう少して回復します」

「ふん、まあ動ける時は急に動けるようになるからな。六時になったら動き出せるとか、そういうもんじゃねえんだ。とりあえず回復して、その時を待つ。まあ回復する手立てはそれしかないな」

そう言って、ぴよんと窓から外へ出て行ってしまった。

外界に心を開く

もう日が傾き始めていた。まだ体は動かない。チョンサは目を閉じた。そうすると、外から小鳥の鳴く声がした。

ピーチクパーチク。なんだかおしゃべりをしているようだ。

その時なぜだかわからないが、チョンサは小鳥たちに応援されているような気になった。

チョンサ、頑張れよ、応援してるぞ。ピーチクパーチク。

チョンサは昔から鳥が好きだった。自由にどこまでも飛んでいける鳥。チョンサは空を眺めながら、そんな鳥を見るのが好きだったのである。

その鳥からなんだか応援されているような気がした。

そう思うと、なぜかチョンサは体が動くようになっていくことに気付いた。

なんだったのだろう、ポイントは。それは時に応じて違うのかもしれない。

誰かから声をかけてもらえたことや、何か自分の好きなことに触れたときなのかもしれない。

いつ復活するかわからないのは、非常に不安である。しかしいつか必ず復活できる。それまではとりあえず安静にして、精神的、体力的にも体を回復させることが重要である。
あとは周りとうまく調和して、復活の兆^{きざ}しを掴^{つか}むのが良い気がした。

日記…回復のしかたは、まだまだ難しい

○月○日 雨

ここ最近また頑張りすぎてしまったためか、体がダウンしてしまった。

ダウンといっても熱を出したりしたわけではない。なぜか体が動かなくなってしまったのだ。

ただ、比較的早く、一日くらいで復活できた。忘れないようにコツをここに書いておこうと思う。

まず徹底的に休んで体力を回復させることだ。物理的に体が疲れてしまっているので、よく寝てよく食べる。太陽の光を浴びる。適度な運動をするなど、いわゆる健康的と呼ばれることはやった方が良いでしょう。

あと復活できるかはタイミング次第なことがある。今回ぼくはひょんなことから復活できたが、日によって違うと思う。ただこういう時は自分の中にふさぎ込みがちなので、周りに心を開くというか調和するような気持ちで心を開いてみると、いいふうな気がする。

次、会社行った際、ダーヨさんから「なんだか吹っ切れた様子で、顔が晴れやかですね。よかったですね」と言われた。やはり顔にも出ていたらしい。脱力とリラックス。なんと奥深いことか。ダウンしないように、回復のしかたをしっかりと学びたいと思う。

第7章 力の入れどころ

他人を優先してしまう症候群

今日の相談者さんは、人のことを優先しすぎて、自分のことを大事にできず、困っているという相談であった。

今日のこちら側の布陣は、ダーヨ、チョンサ、ムネマと勢揃いであった。ダーヨとチョンサ、それに相談者はソファに腰掛け、ムネマは窓辺で寝そべるというスタイルであった。

相談者が堰を切ったように話し始めた内容によると、昔から人に逆らったり、反対することが苦手なこと無かれ主義だという。平和が一番といった考え方の持ち主で、自分が我慢して事が解決するのであれば、すぐ口をつぐんでしまう。

だがその我慢は着実にストレスになっていて、早く自分一人になりたい、他人とは距離を置きたいと人を遠ざける傾向があった。

それに一人になると今までの我慢を解消するかのようになり、自分の好きなことをしてしまい、暴飲暴食に走る。それにより健康被害を被るようになっており、どうにかこの悪循環を断ち切りたいということであった。

「まったく、この人間もいろいろと気にしすぎなんだよ。やりたいようにやったらいいじゃねえか、女々しいなあ」

人間からしたら、ニヤーと言っているようにしか聞こえないが、猫語がわかるチョンサには、ムネマがそのような言っているのがはっきりと聞こえた。

そんな簡単に性格が変えられたら苦労しないですよ。そうチョンサは心の中で言った。

ひとしきり相談者からの告白が終わると、ダーヨが口元に手をやりながら話した。

「まあ、あなたのお気持ちはわかりますよ。でもどうしたものですかね。こういう時は水晶すいしょうに占ってもらいますか」

一応、ダーヨは占い師ということで商売をしているので、水晶のようなザ・占い師というアイテムも持ち合わせている。しかし占いは形だけで、ダーヨの中では答えは決まっているのだ。一応形だけはやっておくということで、時々こうして水晶で占ってみたりしている。

紫色の水晶を持ってきてテーブルの上に乗せると、ダーヨは目を閉じ、ごによごによと言い始めた。しばらくして目を開くと、占いの結果を相談者に伝えた。

性格は変えられない

「そうですね、ズバリ出ました」

「私はどうすればこの苦しみから解放されるのでしょうか」

相談者がそう聞くと、ダーヨは予想外の回答をした。

「はい、ズバリ、これは性格の問題なので、どうしようもありません」

「そ、そんな・・・」

元も子もない回答で、相談者の顔に絶望の色が浮かんた。奥の窓辺ではムネマがにやにやしているように見えた。

「ったく、甘えたことを言っていないで、嫌なものは嫌。そうじゃなかったら我慢するんだな。それに我慢できるくらいのことってことさ。本当に嫌なことだったらちゃんと断っているって」

ムネマのコメントは辛辣しんらつであった。それに対し、ダーヨからの答えは幾分いくぶん優しいものであった。

「占いではどうしようもないということでしたが、少し私から補足すると、多分あなたは前に嫌なことを断って嫌な思いをした。そんな嫌な思いをするくらいであつたら、最初の嫌なことは受け取ってしまった方がいという決断をしたのだと思います。」

確かにそれは良い判断なのですが、ずっと反抗しないままだと心が沈んでいってしまいます。何か紙に自分の気持ちを書くなどして、自分の気持ちを可視かしか化したほうが良いでしょうね」

相談者は真剣な眼差しでダーヨを見ている。

「それはすでに行おこなったのですが、ペンを取るのが億劫おっくうでなかなか続けられないのです。もしかすると自分の中で、どうせ書いたところでこの問題は解決しないと思ってしまうのかもしれない」

「じゃあ独り言を言ってみるのはいかがでしょう」

咄嗟とっさにチョンサは自分の考えを言葉に出した。

「それもやってみました。しかしなんとなく気持ちが沈んでいる時に、独り言を言ったり、文字を書いたりするのは億劫なんです」

どうやらこの相談者はあらゆることをしたが、それでも改善せず困っている様子であつた。

「解決しないことだよ」

ムネマはぼそつと言った。誰に言うのでもなく、遠い目をしてそう言った。

「そんなに性格が変えられねえって駄々だだをこねるんだつたら、もう変えるのは諦めるんだな。どうせさっきも言ったみたいに、本当にまずい時は断るだろうよ。」

それよりもそんなにどうしようもねえと思っっていることに時間をかけるより、もっと自分の好きなことをすればいいと思うけどな」

ムネマはそうぼやき、ぴよんと窓辺から出て行ってしまった。

動かない石より、動く石を

確かに性格を変えるのは難しい。であればそこに労力るつりよくをかけるより、自分の好きなことに時間をかけた方が有意義ゆういぎではないのだろうか。

チヨンサはムネマの言葉を代弁だいべんするかのようになり、相談者に話した。

「性格を変えるのって難しいですよ。だったらそこに時間をかけるのではなくて、ご自分の好きなことに時間をかけるのはいかがでしょうか」

チヨンサの言葉に、相談者のみならず、ダーヨも驚いた様子であった。

「私の好きなこと・・・あります。確かにあーだこーだと悩むより、その時間を自分の好きなことに使った方がいいかもしれません」

相談者はいくらか合点がいったような様子であった。

「チヨンサさんの今のアドバイスはいいですね。先ほどの水晶の占いの結果のように、性格はなかなか変えられるものではないのですよ。でしたらそれをどうこうするより、ご自分の好きなことに時間を割いた方がいいのかもしれないですね。動かない石を頑張っって押すより、動く石を動かした方が有意義かもしれません」

ダーヨからの言葉に相談者はコクリとうなづき、納得した様子で、ダーヨの事務所を後にしたのであった。

相談者を見送った後で、ダーヨはチョンサに尋ねた。

「チョンサさんが相談の内容に直接アドバイスをするのは、今日が初めてでしたね」

チョンサはどきりとした。相談者はダーヨに対して相談をしにきているのに、自分がしゃしゃり出て、偉そうにコメントをしてしまった。怒られるかと思った。しかしダーヨの反応は違っていた。

「あちらのアドバイス、芯しんについて良かったと思います。私はどうしても問題を解決しようとしがちですが、そうではなくてそこは置いておいて、違う自分のメリットが出せる方に注力する。よくそのポイントに着眼ちやくがんできたものです」

ダーヨはアドバイ스가良かったと褒めてくれた。しかしチョンサは言えなかった。それは自分のものではなく、友達の猫の言葉であったと。

そんなことは言えないので、少し申し訳なさそうに、チョンサはうなづくのであった。

チョンサの日記「どこに力を入れるか」

○月○日 くもり

今日は初めてダーヨさんと相談者さんとの会話に、口を挟んでしまった。

猫のムネマさんが言っていた言葉が、いいアドバイスだと思って、それをみんなにシェアしないのはもったいないと思ったのだ。結果、ムネマさんの言葉は相談者さんにも響いたみたいだし、良かった。

性格はなかなか変えづらいものだと思う。もちろん矯正きょうせいし続ければ直るのかもしれないけど、相当骨が折れるのは確実だろう。それよりも自分の好きなことに注力したほうが、幸せな人生を送れるのかもしれない。

第8章 良さの伝え方

良さが伝わらない

今日の相談者も、眉間に皺を寄せ、明らかに困っている風の男性であった。ダーヨとチョンサはソファに並んで腰掛け、相談者からの話を聞いた。

その男性は万病に効くという不思議な飲み薬を売っているが、なかなか売れず困っているという。試しに飲んでみてほしいという願いから、恐る恐るチョンサは飲んでみた。こういうとき、ダーヨは素知らぬ顔をして、そういう危険なものは摂取しない。しかしチョンサは少しだけ好奇心が勝ち、その飲み薬を飲んでみた。

意外に甘い味で、少し変な感じもした。しかし不味くはない。飲んでみたが、特別元気が出てくるというわけではなかった。

しかしそこからしゃべって数分経った頃、いやに自分のテンションが上がってきていることに気づいた。いつもであればこういった相談の場でしゃしゃり出てコメントするのは差し控えるのだが、なぜだか言葉が後から後から出てきてしまった。

これがこの飲み薬の効果であった。万病に効くというよりも、テンションが上がる、一種の興奮剤のようであった。

別にこれが良いか悪いかは置いておき、なぜこれが売れないのかがさっぱりわからないというのが相談者の悩みであった。

「これを飲むと元気が出るんです。いろんな人の役に立つと思って売り歩いているんですが、なかなか売れなくて……。どうすれば売れるようになるんでしょうか」

まゆをへの字に曲げた相談者であった。ダーヨは薄気味悪そうに、チヨンサが飲み切った飲み薬を見てから言った。

「口に入れるものというのは誰しも抵抗感があります。その抵抗感をなくすために広告を打ったり、みんながすでに飲んでいるという風に見せかけて、飲むのは安全だと思い込ませているのです。」

あなたが個人的にやっても、いきなり見ず知らずの人が来て、これは万病に効く薬です、と言われ
ても気味悪がって飲まないでしょう」

悔しそうに相談者はダーヨに食らいついた。

「でも、でもこれは本当にいいものなのです。確かに飲み終わって少しすると脱力感が出ますが、一気に力が出るという点においては非常に価値のあるものです。これを欲しがっている人は必ずいます。私はそういう人にこれを届けたいのです」

「まじめだねえ、この人間も」

ふと見ると、いつもの窓辺の定位置に猫のムネマが少し笑いながら体を横たえている。

いや、正確に笑っているのかは猫だからよくわからないのだが、チヨンサには薄ら笑っているように見えた。

「この人間は信じ切っちゃっているわけだ、これが役に立つってな。恋は盲目もつもくってのは人間のことわざだったな。それと同じだよな。あまりに没頭ぼつとうしすぎてしまうと周りが見えなくなっちゃう。それのいい例だろ」

そこまで言うとうムネマはあくびをした。鋭いが小さな歯たちがよく見えた。

きつと他の人たちにはニャーニャーと猫が鳴いている風にしか聞こえていないのだろう。そのニャーニャーという声が止んだからか、ダーヨが再び口を開いた。

「あなたの熱意はわかります。いいものを共有したいというのは、集団生活を営む人間にとって、とても基本的なことです。あなたは間違っていない。

でも伝え方というのがありますね。さっきも言ったように飲食物を売るのであれば、安全・安心がまず担保たんぽされていないと人は買いません。そこを少し考えた方がいいでしょうね」

がつくりと相談者は肩を落としてしまった。何か有益なアドバイスがもらえるかと思って期待していたのに、それほど大した話が聞けなかったからであろう。なにか空回りしているこの相談者が、チョンサはかわいそうになってきた。

元より、このダーヨの占い（という名の相談）に来る人は真面目でいい人ばかりである。真面目で頑張るすぎるが故に、固くなってなかなか人に受け入れてもらえていない。頑張っているのに成果が出ないからモチベーションが低くなったり、できない自分を責めていたりする。完全な悪循環おちいっに陥っていた。

相手は何もわかっていない子どもである

相談者から半ば強制的に飲まされた飲み薬のせいで、テンションがいつもより高くなっていたチョンサは、こう言った。

「ぼくも自分にとってはいいと思うのにそれがなかなか相手に理解されなくて、すごく悲しくなったり、逆にこの素晴らしさがわからないなんて、なんて相手は愚おろかなんだと思ってしまふことがあります

す。

でも思うのが自分は教師だと思うことにしているんです」

「教師？」

相談者は明らかに顔にクエスションが浮かんでいた。しかしダーヨとムネマはハツとした顔をしていた。

「はい、教師です。つまり自分はわかっているが、相手はわかっていない子ども。相手にわかってもらうためにはどうすればいいかを考えるんです。相手が子どもだと思って、どうすればわかってもらえるかを考えるんです」

今度ははっきりと笑っているのが見えたムネマが言った。

「おお、それはナイスアイデアだよ、チョンサ。そう、相手は何もわかってねえガキンチョだ。それに教えてあげるくらいの気概きがいでないと」

ダーヨも、

「いいアイデアですね、チョンサさん。相手が子どもだと思えば、これはいい薬だよ、と怪しいおじさんから言い寄られても絶対飲みませんものね」

怪しいおじさんと言われて普通は力チンと来そうなものなのに、アイデアの素晴らしさにそれを忘れ、相談者も興奮気味に言った。

「そうですね！言われてみればそれはそうだ。まず薬だなんて言われて子どもが飲むはずもない。

私はどうやら相手を自分の言うことをちゃんと理解してくれる立派な大人だと、高く見積もりすぎていたかもしれない」

そう言ってウンウンと相談者はうなづいた。チョンサは話を続けた。

「まず相手を何もわからない子どもだと思って、理解できる説明を心がける。でもわかってもらえなくてもいいのかもしれない。自分の発することがまだ相手に理解できるくらい具体ぐたいになっていない。そういう時は総そうスカンを食らうことになるでしょう。」

でもその時も、そりゃあよくわからないことをしているんだから、無視されるのは当たり前というくらいの気概を持った方がいいのかもしれない。それにそれ続けていればよくわからないが何か続けている人と、興味を持ってくれるかもしれない」

チヨンサの言葉に他の三人（うち猫一匹）は納得した様子でその日の相談は終わったのであった。

チヨンサの日記…わかってくれずとも良い

○月○日 晴れ

今日も相談の場でたくさん話してしまった・・・あの飲み薬のせいだ。あれのせいでテンションが変な感じになってしまった。あの場は頭が回転してよかったけど、夜になると気分が悪くなったから、もう飲むのはよそう。

でも子どもに教えてあげるくらいわかりやすくというアイディアはよかったな。それに別にわかってもらえなくても気にしないという見方もよかったと思う。わかってもらえなくても続けていれば何かしら興味は持ってくれる。大丈夫、そのまま進んでいいということがなんとなくわかった気がする。

第9章 育児と育猫

パパとしてのムネマ

チヨンサと猫のムネマは公園でひなたぼっこをしていた。チヨンサの方はこれからダーヨと一緒に相談者の相談に乗るのだが、その前に少し休憩を取っていた。

ムネマはいつも暇そうにしているので、別に今日は特別変わった日ではない。しかしムネマの顔は曇りがちであった。

「どうしたんですか、ムネマさん。今日は元気がなさそうじゃないですか」

いつもはすぐに憎まれ口を叩くムネマなのに、元気がない様子が不安で、チヨンサは声をかけた。ムネマは少し遠い目をしながら言った。

「いや、俺の子どもがな……。全然言うことを聞かなくてな」

猫の世界では、人間世界とは違って、結婚して子どもができて、あまり父親が育児かんよに関与するということはないらしい。

基本的に奥さん側が子どもの面倒を見るといって、父親は子育てをしない。そういうのが猫社会の一般的な家庭像らしい。

ふらっとどこかに遊びに行って、好きなことをして家に帰ってくる。そんな何もしない父親なのに猫社会ではそれでいいらしい。楽な父親だなと、その話を聞いたとき、チヨンサは思った。

ムネマには三人の子どもがいる。まだ成猫になっておらず、小さい子猫たちだ。

「この前久しぶりに家に帰ったらよ、子どもたちがなんとなく俺の言うことを聞かなくなっているんだよ。あんまり家に帰らないからかな。父親の威厳いげんが失くなってきているのかもしれないね」

「どうやらムネマは父親の威厳が失われていることに、危機感を覚えているらしかった。」

「ムネマさん、猫の世界はどうだか知らないですけど、もっと家に帰った方がいいですって。そんな感じで独身時代と同じスタイルじゃなくて、もっと家庭にいないと」

「そういうチョンサを邪険じゃけんに扱い、あつか

「うるせえなあ。俺はお前みたいに奥さんにペコペコして、ヒイヒイ言いながら仕事をする人間の生き方は、まっぴらごめんだね」

「そう言うともムネマは去っていった。」

邪険にされるムネマ

ムネマが家に帰ると、奥さん猫と、子猫三匹はちょうど家にいた。四匹でどこから取ってきたのか、魚を食べている。ムネマはまだご飯を食べていなかったことに気づいた。

「おっ、サンマか。いいじゃねえか。俺にも少し分けてくれよ」

そんなムネマを差し置いて、無視するかのように、奥さん猫も子ども猫たちもムネマには話しかけなかった。いい加減ムネマも腹が立ってきた。

「なんだよ、いったいなんなんだよ。無視しやがって。俺は父親だぞ。そんな舐めた真似してタダで済むと思ってるのか！」

ムネマはかなり語気が強い口調で怒鳴ったが、四匹とも黙ったままでだった。ボソリと奥さん猫が言った。

「あなたは自分が今まで何をしてきたのかわかっているの？家にも帰らずフラフラして、たまに帰ってきたと思ったら偉そうにして。それで慕ってもらえると思っているの？子どもたちの気持ちも考えてよ」

奥さん猫からそう言われ、バツが悪くなったムネマは今度は家から飛び出していったのであった。

育児に悩む人間

ムネマはトボトボと歩き、結局ダーヨの事務所に戻ってきてしまった。ダーヨとチョンサがもう一人の人間と話をしている。また困ったやつが来たかと、ムネマは辟易とした。

耳を傾けてみると、子育てにうまくいっていないという母親であった。母親は涙ながらにこう話した。

「うちの主人はろくに仕事もしないで遊び呆けて、たまに帰ってきたら飯はあるのかって、本当に頼りがなくてろくでなしなんです。なんであんな男と結婚したのか。私の人生の本当に汚点おてんです」

ムネマはどきりとした。猫の自分のことであるはずがないのに、さも自分が非難されているかのような気がしたのだ。人間の相談者は話を続けた。

「実は、子どもが学校になじめていないみたいなんです。なんだかお友達と合わないらしくって。本当は主人にも相談に乗ってあげてほしいんですけど、この調子でしょ……。頼りにならなくて」
ずっと話を聞き続けていたダーヨが初めて口を開けた。

「お子さんはご主人のことをなんとやっているんでしょうか」

「本当は子どもたちはパパのことが大好きなんです。でもずっと家にいないから拗ねてしまつて。私のように冷たく対応してしまつています」

ムネマは複雑な気持ちであつた。自分の子どもたちは自分のことをどう思っているんだろう。さっきもサンマを全然分けてくれなかった。とつくの昔に嫌われてしまったのだろうか。でも嫌われても当然か。飯をろくに家に持ち帰らず、フラフラしているだけの父親だ。そんな父親を好きになつてもらえる方が不思議だ。

ボーとしているムネマであつたが、そんな状況を一変いっぺんさせることが起きた。なんとムネマの奥さん猫がダーヨの事務所にものすごい速さでやってきたのである。

ゼエゼエ言う奥さん猫に向かって、

「なんだ、なんだそんなに慌てて。さっきのことは俺は謝らねえぞ」

奥さん猫は首を振つて、ムネマの主張を否定した。

「そんなんじゃないの！さっき下の子が友達と喧嘩して怪我を負つて。病院に行ったの！」
病院？怪我？大丈夫だろうか……。下の子猫の顔が瞬時にムネマの頭に浮かび上がった。

次の瞬間に、ムネマは飛び出してた。

暴力は振るうな

下の子猫が治療ちりょうされていたのは、レストランの裏手にあるゴミ捨て場であつた。よく野良猫たちはここでたむろする。そしてその一角には「病院」と呼ばれ、怪我をした野良猫が運ばれる場所があつた。下の子猫は誰かに手当され、横になつてた。

「おい、大丈夫か」

「あ、お父さん」

気づくと下の子猫は身を起こそうとした。

「別に起きなくていい。そこでゆっくりしとけ。でも一体全体何があったんだ」

そう言いながら周りを見渡すと、あと五、六匹の猫がどこかに怪我をして横たわっていた。

下の子猫から聞くに、ところどころ辻褄^{つじつま}が合っていないなくてよくわからなかったが、どうやら相当馬鹿にされてこちらから手を出してしまっただけらしい。

「お前の言うことはわかるが、手を出すのはまずかったぞ。手を出した方が悪くなっちまう」
そう言っていると、後ろから声をかけられた。

「お宅か、うちの次男坊を爪で引っ掻いたやつは」

振り返ると、下の子猫と一緒にいる猫と、親猫がこちらを見ていた。どうやらムネマの子どもが手を出してしまった猫と、その親らしい。一緒に怪我の手当をされていたのだ。

ムネマはまずはしっかりと謝った。

「この度は申し訳ねえ。手を出しちゃったのは申し分の立たねえことだ。すまなかった」

ちゃんとムネマは謝ったが、向こうはそれで図に乗ったのか。色々と言い始めてきた。

お宅の子はすぐに暴力を振るうだとか。

何を言っても、言うことを聞かず、周りに迷惑をかけているとか。

散々文句を言われ、ムネマは腹が立ってきた。

「おい。好き放題言わせておけば図に乗りやがって。こっちが手を出してきたのも悪いが、そっちも仕返ししてんだから、お互い様だろうが。それをなんだ、ぐちぐちと」

危うく喧嘩になりそうだったが、遅れて到着したムネマの奥さん猫になだめられ、その場は親同士の喧嘩に発展することではなく、解散となった。

ムネマ、奥さん猫、下の子猫はとぼとぼと家路に着くために歩いていた。その時、下の子猫がボソリと言った。

「お父さん、お母さん、ごめん、僕のせいで、迷惑をかけて」

ムネマは胸が痛くなった。そして言った。

「いいんだ。別にお前が100%悪いってわけじゃねえ。お前にはお前の言い分があるんだろう？ だったら別にそんなに反省することはないさ。ただ、暴力を振るうことはもうしないでくれよな」
コクリと下の子猫はうなづいた。

親のできること

ムネマが子猫を連れて家に帰っていた頃、ダーヨの事務所ではもうそろそろ相談の時間が終わりそうになっていた。

実はこの相談者の母親も学校でトラブルがあり、子どもが喧嘩をしてしまったらしい。どう対処しようかとの悩みも相談されていた。

ダーヨのアドバイスはこうであった。

「子どもは子ども同士、いろいろと同じ場所で生活していたらトラブルもあるでしょう。しかし大事なことは、親は子どもの味方であるということだと思います。やはり子どもが頼りにできるのはまずは親です。その親が自分の子どもを信じないでどうするものかと思うのです。」

何があっても自分の子どもを信じること、愛することが、親のできることなのではないでしょうか」

チヨンサの日記：子どもには幸せになってほしい

○月○日 晴れ

今日の相談者さんはママさんで、子どもの育児に関する相談だった。

ぼくにも子どもがいるが、いろいろと考えながら日々送っている。でもやっぱりダーヨさんも言っていたが、親ができることなんて、やっぱり子どもを愛することだったり、一番大事に思うことじゃないかと思う。それが今の自分に十分できているかわからないけど、子どもたちといえると幸せだし、それでいいんじゃないかと思っている。自分は幸せ者だし、子どもたちにも幸せになってほしいと思う。

第10章 失敗とはなにか

卒業

今日の相談者はチョンサであった。というより先日急にダーヨからこんな話があった。

「チョンサさん、あなたの行動や考え方は既に私同等か、それ以上です。これ以上私の元にいても学べることは少ないでしょう。それよりも独立して一人でやっていった方がはるかに勉強になるはずですよ」

それはダーヨの元を離れ立ちせよという卒業宣言であった。

最後に自分もダーヨに相談をしたいということで、時間を取ってもらったのだ。

ダーヨは言った。

「私から一つあなたに伝えたいことは、失敗を恐れないことです」

「失敗を恐れないこと・・・ですか」

「そうです。私があなたを見ていて気になることは、正解を求めすぎてやしないか、ということでした。

チョンサさんは非常に真面目な性格をしていらっしやいます。正解やあるべき姿を求め、それを修行僧しゆぎようそうのように突き進む感じを受けます。

しかし人生はそんなに堅苦しくなくてよくて、失敗をしても良いのです。そこから学べるのがたくさんあります」

ただ、チョンサは、はい、わかりました、と軽い返事を返すことができなかった。

やはり失敗はできるだけしないほうがいいと思うていたからだ。何事も成功の連続の方が理想に近づける。であれば失敗はない方がよりいいのではないか。

それをダーヨに話したところ、こんな回答が返ってきた。

「それは今まで、失敗はしてはいけないと、ある意味洗脳せんのうされてきているんだと思います。

学校や教育で、テストの点数が良いからあなたは良い子と、そういう条件反射を思い込まされた子どもは、テストの点数が悪い自分を受け入れられなくなります。それは点数が悪いと相手からの承認しやうにんを得ることができないと思っているからです。

学校のテストなんて、一つの価値基準かちきじゆんに過ぎません。それが悪くてもその子の人間性や価値には、なんの影響も及ぼしません」

「本当にそうかな」

気付けば事務所の相談室には猫のムネマも侵入してきていた。いつもの窓辺からこそっとやってきたのである。

ムネマは続けた。

「俺は人間の世界はよくわからねえが、こっちの猫の世界はちげえぜ。そんな甘い話は通用しない。餌をちゃんと取れる野良猫が生き残るし、ぐずな猫は生きられねえ。良いとは生きれること。悪いことは生きられないことと、はっきり決まっているんだ」

そう思うと、今の人間社会は裕福で、食いっぱぐれなんてすることはない。しかし人間の本能には、これをやったら食いっぱぐれる、つまり死ぬかもという恐怖の心が残っていて、それが過敏に反応しているのかもしれない。

どこまでが、生きれるのラインか

それでは、生きれることと、生きれないことの境目さかいめはどこにあるのだろうか、チヨンサは考えた。

「ダーヨさん、確かにいいも悪いもそんなに気を遣いすぎなくても良いのかもしれませんが。ただぼくは、どこまでの失敗が致命傷にならないのか、その線引きがよくわかっていません」

チヨンサは眉をひそめながら考えていた。

ダーヨは優しくチヨンサに声をかけた。

「あなたのその真剣に考える姿勢は素晴らしいと思います。それが諸刃もろはの剣となり、時に疲れてしまうこともあるでしょうが。」

今の疑問、つまり生きれることと生きれないことの境界線の話ですが、それは言葉では表せないことなのかもしれません」

「と言いますと?」

「つまり、頭でこれは危ない!と思っているのなら、もうそれは怖いものとして受け入れるしかないということですよ」

「でもダーヨさん。例えば仕事の話で例えると、ぼくは仕事をしていて、自分が使えない人間だと思われたり、ミスをしでかすことにすごく恐怖を覚えます。これをやったら集団から仲間外れにされると感じて怖いんです。」

これは頭で危ない!と感じていることです。しかしぼくはこういう恐怖を取っ払いたいんです。もうこういった周りの目を気にして生きていきたくないんです」

ダーヨが答える代わりに、ムネマが答えた。

「ふん、だったら、お前が強くなるしかねえよ。強くなって相手を見返すか、相手を自分の支配下に置いて安心するか、どちらかだな」

手厳しいムネマの意見。ダーヨが口を開いた。

「きつとチョンサさんは今までのどこかで失敗をして仲間外れにされた経験を持っているのでしょう。それが心の傷になって、集団からはみ出したり、正解しないことの恐れを抱いているのだと推測します。それは長い時間をかけて癒していくしかないのかもしれないかもしれませんね」
それから少し話をして、最後握手をしてダーヨと別れた。

本能による回避

家路^{いえじ}に帰る際、ムネマも一緒についてきてくれた。

「お前、これからどうするんだよ」

ムネマに問われたが、実際チョンサは何も考えていなかった。

「そうですねえ、どうしましょう。まさかこんなに早くダーヨさんの元を離れるとは思っていなかったの、何も考えていません」

低くなった太陽からの夕日を真横から受けて、眩^{まぶしい}しい中、一人と一匹は歩き続けた。

「俺は猫だから人間の考えはよくわからねえがよ。失敗してもいいんじゃないやねえかな」

「何が無責任な。ダメですよ、失敗なんかしちゃ。成功し続けることが大事なんです。できれば失敗

なんかしない方がいいんですよ」
頑^{かたくな}なに失敗を嫌がるチョンサに、いささか辟易^{へきえき}としながら、ムネマは話した。

「例えばよ、厳しい野良猫世界じゃ、餌にありつくことが一番。二番目は野良犬に襲われないこと、三番目に人間にいじめられないことが大事なんだ。これが野良猫の世界の三箇条かじょうなのさ。」

お前の中にはこういうルールみたいなものはあるんか」

ルールと言われてパツと思いつかなかったが、考えながらチヨンサは答えた。

「うーん、そうですね。相手を傷つけないこと。優しくすること、社会を良くすること。こう言ったことが大事だとぼくは思っています」

「それはなんでそう思うんだ」

そう言われても難しいなとチヨンサは思った。今まで生きてきた中で、なんとなく自分の中で根付いた価値観である。誰かから教わったり、今までの人生でこの価値観で生きた方が良さだろうというなんとなくの勘が働いているところもある。

「なんとなく、今まで生きてきた中でそう思っただけです」

その言葉を受けてかどうかかわからないが、ムネマはチヨンサに言い放った。

「お前は本当の死の危険に遭ったことがないから、逆にいるんなことが怖いと思ってしまっているんじゃないか。人間世界は平和だから、平和ボケしているのかもな。別にそれはお前が悪いことじゃねえし、危険にはできるだけ遭遇しない方がいいから、それはそれでいいんじゃないかな」

死の危険を味わったことがない。確かに生きてきて、本当に瀕死の状態になったことはない。それはありがたいことだ。一方、どこまでまづいことをしたら危険になるのか。それがよくわかってないから、変な妄想で苦しんでしまうのかもしれない。

そんなとき、道の反対側から、網と大きな力ゴを持った人が五、六人で向かってきた。

少し様子がおかしい。目がぎらついていて、戦闘体制といった感触を受ける。

「むっ、あれも野良猫じゃないか。捕まえる！」

その人たちは町の治安や風紀を守るための自衛団^{じえいだん}であつた。あとあとわかつたことだが、最近野良猫が増えて町を汚したりするから、野良猫を全部捕まえてしまおうとしているらしい。

かわいそうに、捕まえられると狭い小屋に閉じ込められ、粗末な食事しか与えられず、生涯そこに閉じ込められてしまふらしい。

ムネマは動物の直感が働き、これはまずいと思つたらしかつた。すぐに向かつてきた人間たちに背を向け、走り出した。

そして人間が行きづらい家の屋根にピヨンと飛び移つた。

しかしムネマは昔の傷のせいで、左足がうまく動かない。急な動きに体が動かずバランスを崩し、ヒューと屋根から落ちてしまった。

しかもこともあるうに、チヨンサの頭の上に落ちてきたのだ。

ごちん！

鈍い音がした。チヨンサとムネマはぶつけた頭を抱え、痛みにはばらく悶絶した。

「いてて・・・大丈夫ですか、ムネマさん」

呼びかけたチヨンサへのムネマの回答は驚くべきものだった。

大丈夫だよ、とか痛えじゃねえかと毒付くのではなく、なんと

「にゃん」

としか言わなかったのだ。そこからムネマはなんとか人間の言葉を喋ろうとしているらしいのだが、もうチョンサにはにゃーんとししか聞こえなかった。

猫の言葉はわからない、前の状態に戻ってしまったのだ。

そこへ先ほどの野良猫を確保しようとしている自衛団の数名が駆けつけた。

「大丈夫ですか、頭をぶつけましたかね。全くひどい野良猫だ。こいつは捕まえていきますね」
にゃーん！と抗議するムネマ。自然とチョンサはこう言った。

「この子は野良猫ではありませんよ。ぼくの飼いだ猫です」

「えっ、そうだったのですか。首輪をしていなかったの、野良猫と思ってしまいました。」

野良猫と思って捕まえてしまうかもしれないので、今度からは首輪をつけてくださいね」

そう言っ、野良猫を取り締まる自衛団の人は去っていった。

にゃーんとムネマはチョンサに寄り添ってきた。これも何かの縁だ。ムネマを一人にはしておけない。それに野良猫の取り締まりが厳しくなるのであれば、ムネマの奥さんと三人の子どもも面倒を見なければならぬだろう。

一方、人間と喋れなくなったムネマは、心の中でこう思っていた。

「いや、危ないところだった。野良猫の少しくらい、見逃してくれた方がいいのにな。それにしても冷や汗をかいたぜ。チョンサ、これが本当の恐怖だぜ。本当の恐怖のときは頭の前に体が動くのさ」
人間一人と一匹は、ムネマの奥さんと子どもを迎えに行くため、ムネマの家に急いだ。もう日が暮れそうであった。

チヨンサの日記…ダーヨさんとの別れ、ムネマさんとの共存

○月○日 くもり

今日がダーヨさんの事務所で働く最終日だった。ダーヨさんからは多くのことを学んだ。社会のこと、人間のこと、考え方。全てが自分の血肉となっており、感謝しても仕切れない。

ダーヨさんが最後に言ってくれた言葉が忘れない。

「あなたは自分思う以上に素晴らしい人です。あなたはものすごく謙虚なのでそれに気付いていないようですが、あなたの周りにはたくさんの人に囲まれています。困ったときは私でもいいし、他の人に頼ってもいいですよ」

やはりダーヨさんはいい人だったのだ。冷たかったりそっけなかったりするけど、実はいい人なんだということがよくわかった。

今日から我が家にいきなり五匹の猫が増えた。ムネマさんとその家族たちだ。奥さんにはしこたま怒られたが、連れてきてしまったのだから、仕方がない。もうムネマさんとは会話はできなくなってしまうが、なんとなく意思疎通はできている気がする。これからムネマさんと一緒なのは、嬉しい。

第四部 完